

喰うか喰われるか? (後編)

——ラテンアメリカをめぐる「喰人」表象の変遷に関する一考察——⁽¹⁾

後 藤 雄 介

【目 次】

1. 「喰らう」ラテンアメリカ——コロンブスから「アメリカ学派」まで
2. 「喰われる」ラテンアメリカ——キャリバン化する米国に抗して
 - (1) 物質主義の脅威
 - (2) 精神性の逆襲

[以上, 前編]⁽²⁾

[以下, 後編]

3. ふたたび, 「喰らう」ラテンアメリカ——「喰人宣言」するブラジル
 - (1) 1920年代のブラジル・モデルニズモ
 - (2) 「喰人宣言」の射程
4. すべてを「喰らう」ラテンアメリカ⁽³⁾——ポストコロニアル的主体考
 - (1) 自己肯定するキャリバン
 - (2) キャリバンと「メスティサヘ」

むすび

3. ふたたび, 「喰らう」ラテンアメリカ——「喰人宣言」するブラジル

ウルグアイの思想家ホセ・エンリケ・ロドーの『エアリエル』(1900)によって, 野蛮を体現するキャリバンのイメージは米国に投影され, ラテンアメリカは米国の覇権主義によってむしろ「喰われる」存在へと転じた。しかも, 自身を高貴な精神性 (espíritu) を持つ妖精エアリエルにたとえることで, ラテンアメリカは自己を肯定する契機としたのであった(前編2.(2)参照)。

ところが, 1920年代のブラジルでは, みずからふたたび「喰人」にたとえる宣言が高らかに謳われた。それがオズワルド・デ・アンドラーデ (Oswald de Andrade, 1890-1954) の, その名もずばり「喰人宣言」(Manifesto Antropófago, 1928) である。

（1）1920年代のブラジル・モデルニズモ

1920年代というのは、世界全般に見れば、第一次世界大戦（1914－1918）の主戦場となったヨーロッパが荒廃し、「西洋の没落」(シュベングラー) が取り沙汰され、非西欧が西欧を唯一絶対のモデルとするそれまでの風潮に変化が見られた。しかしながら他方で、社会主義を標榜したロシア革命（1917）のもたらした衝撃は絶大で、また、パリを発信源とする文化芸術、とりわけ当時の前衛主義は非西欧にとって大いなる魅力であり続けた。1920年代には、この西欧とそれが生み出した思想文化に対する両義的な態度が横たわっていることをまずは認識しておかなければならない。

ラテンアメリカにおいては、「西洋の没落」を受けつつ、「自分たちの国と身近にいる土着の人々の中に、ヨーロッパがもはや失ってしまったもの、あるいは最初から全然もっていなかった諸々の特質を発見すべく、「見失われていた足跡を再び辿って」ゆく」、すなわち、ネイティヴィズム（土着主義）に根ざした「文化的ナショナリズム」が模索された（フランコ 1974： 84。傍点強調後藤[以下、特にことわりのない限り同様]）。たとえばメキシコでは、メキシコ革命（1910－1917）を成し遂げた革命政権が、アステカ文明から現在に至るメキシコの歴史を、ディエゴ・リベラ（Diego Rivera, 1886－1957）らに託した「壁画運動」(muralismo) のなかに視覚化した。アンデス諸国では、先住民の復権を唱える「インディヘニズモ」(indigenismo) 運動が、ペルーの独創的マルクス主義者ホセ・カルロス・マリアテギ（José Carlos Mariátegui, 1894－1930）などを中心に、社会変革から文芸創作に至る幅広い分野で展開された⁽⁴⁾。

ブラジルでは、独立百周年にあたる1922年にサンパウロで開催された「近代芸術週間」(Semana de Arte Moderna) に端的に示されるように、1920年代には知識人・芸術家を中心とした「モデルニズモ」(modernismo) 運動が華々しく繰り広げられた⁽⁵⁾。古谷嘉章によれば、ブラジルのモデルニズモを突き動かした背景には、「ヨーロッパのように近代化したいという欲望」と「ヨーロッパの模倣を脱したいという欲望」の「二つの欲望の結合」がある（古谷 2001： 120）。すでに上で指摘したように、非西欧の西欧に対する態度は両義的である。この二つの欲望に沿って、古谷はモデルニズモを「審美的革新が中心テーマ」となる第一期（1917－1924）と「ブラジル性 (Brasilidade)」、 「ナショナルな文化」、 「ナショナル・アイデンティティ」という問題が中心的位置を占める」第二期（1924－29）に時代区分し、前者を「文化の近代化のモメント」、後者を「文化の脱植民地化のモメント」と位置づけた（古谷 2001： 122）。

ブラジルのモデルニズモを代表する知識人・芸術家をあまねく取り上げることは筆者の力量をはるかに越える⁽⁶⁾。ここではオズワルドに的を絞ることにするが、ふたたび古谷にしたがえば、オズワルドの代表的な詩的マニフェストである「パウ・ブラジル詩宣言」(Manifesto da Poesia Pau-Brasil, 1924) と「喰人宣言」とが、それぞれ上記時代区分の画期をなしている。「パウ・ブラジル詩宣言」は、「文化の近代化のモメント」である第一期において、「普遍的近代文芸の世界市場においてブラジル産の文芸に商品価値をもたせる」ことを、「パウ・ブラジル」(ブラジル

木)の「生産」・「輸出」にたとえている。一方「喰人宣言」は、「文化の脱植民地化のモメント」である第二期において、ブラジルの独自性を模索すべく、それを「生産」・「輸出」にではなくむしろ「輸入＝消費」のスタイルに求め、「食人による消化吸収」というレトリックと結びつけているという（古谷 2001: 125-126）。ここにふたたび、「喰らう」ラテンアメリカが登場することになった⁽⁷⁾。以下、このオズワルドの「喰人宣言」を詳しく見ていこう。

（2）「喰人宣言」の射程

「喰人宣言」は、オズワルド自身が主宰する『喰人誌』（Revista de Antropofagia）の記念すべき創刊号に掲載された。「喰人宣言」の書かれた年号は寓話的に「サルデーニャ司教の丸飲みから374年」（Andrade 1981: 72）とされるが、これは「その年にインディオがこの司教を食ったという伝承にもとづいている」（古谷 2001: 126）。ブラジルのインディオ＝先住民といえば「トゥピ」族がいるが、トゥピ族は「倒した敵の力を吸収するためにその肉を食らう」（鈴木 2004: 14）と言われている⁽⁸⁾。「ただ喰人だけがわれわれを団結させる。社会的に。経済的に。哲学的に」（Andrade 1981: 72）の一節で始まる「喰人宣言」の全体はしかし、首尾一貫した論旨によって導かれているというよりも、さまざまな抽象/具象、想像/史実からなるイメージの連鎖で構成されている。

「喰人宣言」には「[～に反対する]という表現が頻出」（古谷 2001: 127）している。たとえば、「すべての教理問答（catecismos）に抗して」、「伝道村の真実に抗して」、あるいは特定の法王・神父名を名指すなど、カトリックに対する批判が目立つ⁽⁹⁾。これは差詰め、未消化物の「嘔吐」かもしくは「拒食」にたとえることが可能で、抵抗のイメージを喚起する。「われわれは一度も文法というものを持たなかった」、「われわれは一度も教化されたことがない」、「われわれは、われわれのなかで論理が誕生したことを認めない」なども同様であろう。

一方で「喰人宣言」は、「われわれは共産主義を持っていた」、「ポルトガル人がブラジルを発見する以前に、ブラジルはすでに幸福を発見していた」といった、西欧からの輸入物の価値を認めるというよりも、むしろそれらがあらかじめ取得されていてあたかも陳腐であり、すでに「排泄」さえされているがごとく自負するフレーズも散見される。

古谷は、「吸収」を軸に「嘔吐」・「拒食」から「排泄」まで自由自在なオズワルドの「アクロバティックな食人主義」——それはまた、「ブラジル文化の異種混濁性」とも位置づけられている——を、「ヨーロッパ文化を「食ってしまう」ことをつうじて消化吸収してしまったのだと主張することによって、植民地化という服属の歴史を逆転してしまう。しかも、気に入ったものは吸収し、不要な害悪は排泄することができるとする自由選択」とした返す刀で、しかしこれを「幻想」と批判し、「この御都合主義的な食人の栄養学は、知識人にとって、劣等感を優越感に変換してくれる麻薬の効果をもつ」と指摘している（古谷 2001: 127）。これはどういうことなのだろうか。

オズワルドの「喰人宣言」は、『テンペスト』を下敷きにはしていないが、試みにプロスペロー/キャリバン/エアリエルの相関関係の観点から分析してみよう。

シェイクスピア研究の「アメリカ学派」は、ラテンアメリカを先住民と同一視した上で、「文明」(プロスペロー) に対する「野蛮」(キャリバン) と位置づけた。これに対してロドーを中心とする一九世紀末の世紀転換期のラテンアメリカ知識人は、米国をキャリバンに仕立て上げ、みずからは精神性において優れるエアリエルであると称した。しかしその際、ラテンアメリカの土着性(先住民および黒人の要素) はむしろ消去され、明示はされていないものの、「ラテンアメリカと米国の二項対立をも超越して存する、西欧中心の知的エリート主義」(プロスペロー) が君臨していたことは、すでに述べたとおりである(前編2.(2)参照)。

「喰人宣言」は土着性を強調している点でロドーの思想とは好対照をなしているが見えるが、じつは「喰人宣言」の背後にもプロスペローのごとき「西欧中心の知的エリート主義」が潜んでいるということができる。たとえば「喰人宣言」のなかには、「しかしながら、現世的な喰人を実現しうるのは純粹のエリートのみ」(Andrade 1981: 72) というフレーズが、さりげなく織り込まれてさえいる。ふたたび古谷の指摘に耳を傾けてみよう。

「ブラジル性」の根拠として、「精神・魂」としての「トゥピ (Tupi)」と称されるインディオが活用される。そこでは、インディオは滅亡したが、その精神は「われわれブラジル人」のなかに息づいている、あるいは蘇るというレトリックが用いられる。しかしそれは現実のインディオとはまったく関係がない。そこには「ブラジルがインディオの墓場のうえに築かれている」という認識は完全に欠落し、同時代の「近代的インディオ問題」についての考慮はまったく存在しない。彼らの用いる「インディオ」というシンボルは、「非ヨーロッパとしてのブラジル」の真正性の根拠として利用されるだけで、その内容は恣意的な妄想に過ぎない(古谷 2001: 129)。

これが「純粹のエリート」の立場である。「ヨーロッパ文化の正会員でありつつ「ブラジル性」の体現者となるという、虫のよいポジション」(古谷 2001: 124) にある彼らは、土着性は必要に応じて利用するだけで、西欧への根源的批判者とはなりえない。その意味で、「喰人宣言」はいまだ肯定的主体としての「喰人」表象とはいえない。「喰人」がラテンアメリカにとって真に肯定的な自己表象となるのは、自身が本当に向き合うべきはだれか、すなわち、「被植民者」=キャリバンとして正面から相対すべきはやはり「植民者」=プロスペローであると、明確に自覚したときである。

4. すべてを「喰らう」ラテンアメリカへ——ポストコロニアル的主体考

本節では、「植民者」=プロスペローに向き合う「被植民者」=キャリバン、すなわち、ポス

トコロニアル的キャリバン像を提示したラテンアメリカ知識人のひとりである、キューバのロベルト・フェルナンデス・レタマール（Roberto Fernández Retamar, 1930- ）の思想を検討する。その前段階として、まずはシェイクスピアの『テンペスト』を植民地の隠喩として読み替えていった、ラテンアメリカにとどまらない、二〇世紀中庸以降の第三世界知識人の動向を整理しておこう。

（1）自己肯定するキャリバン

多くの識者の一致するところであるが、キャリバン-プロスペロー関係を最初に被植民者-植民者関係の構図でとらえたのは、フランスのオクターヴ・マノーニの『植民の心理学』（*Psychologie de la colonisation*, 1950）である（Hulme 2000: 220-221; ヒューム 1996: 14; Nixon 1987: 562; Skura 1989: 44; ヴォーン&メーソン 1999: 212-213）⁽¹⁰⁾。これはのちに英訳・改題されて『プロスペローとキャリバン』（Mannoni 1956）となり、広く世界で読まれることになった。しかしながら、マノーニはもっぱら植民者の「依存コンプレックス」および被植民者の「劣等コンプレックス」を強調したことから、フランス領マルティニーク出身のエメ・セゼール（Aime Césaire, 1913- ）やフランツ・ファノン（Frantz Fanon, 1925-1961）から批判を受けることになる（Hulme 2000: 221; ヒューム 1996: 15）。セゼールは『植民地主義論』（*Discours sur le colonialisme*, 1950）の、ファノンは『黒い皮膚、白い仮面』（*Peau noire, masques blancs*, 1952）の著者として、「ネグリチュード」(negritude) 運動の中心的人物となることは周知のとおりである。

ラテンアメリカ——より限定的にはカリブ海地域のアンティル諸島——において上記図式でキャリバンとプロスペローを位置づけたのは、バルバドス出身のジョージ・ラミング（George Lamming, 1927- ）の『流浪の歓び』（*The Pleasures of Exile*, 1960）が先駆をなすといわれている。それはフェルナンデス・レタマールも指摘・評価しているが、一方で彼は、ラミングが「マノーニの描いた円環〔被植民者に「劣等コンプレックス」を見ること——後藤補足。以下同様〕を打破できていない」(Fernández Retamar 2003: 39 [以下, Fernández Retamarの文献はFRと略記]；岩村 n.d.) とも批判している⁽¹¹⁾。

フェルナンデス・レタマールによれば、1969年に「キャリバンはわれわれのシンボルとして、3人のアンティルの作家によって誇りを持って引き受けられることになる。各々は三大植民地言語によってそれぞれ自己を表現した」(FR 1993: 41)。その3名および作品とは、セゼールの『テンペスト』改題（*Une tempête : Adaptation de La tempête de Shakespeare pour un théâtre nègre*）〔フランス語〕であり、バルバドスのエドワード・カマウ・ブラスウェイト（Edward Kamau Braithwaite, 1930- ）の詩集『島々』（*Islands*）〔英語〕であり、そしてフェルナンデス・レタマール本人の「フィデルに至るキューバ」(FR 1969)〔スペイン語〕⁽¹²⁾である。

すでに述べたとおり、本節では分析の対象をフェルナンデス・レタマールに絞るが、「フィデ

ルに至るキューバ」において「キャリバンとわれわれの同一性」(FR 1993: 41) に端緒的に触れたフェルナンデス・レタマールが、そのテーマを全面的に展開したのが、タイトルもそのものの「キャリバン」(1971) (FR 1971) である。1974年に米国の『マサチューセッツ・レビュー』誌に英訳 (FR 1974) が掲載されてから徐々に注目されるようになり、1989年の単行本刊行 (FR 1989) によって決定的に普及するに至った。

この間、スペイン語圏での普及はむしろ遅れたが、その後、本編「キャリバン」を含み、その他キャリバンをめぐって書かれた評論等も加えた集大成として『キャリバンのすべて』(FR 1995) がキューバで刊行される⁽⁴³⁾。本稿では以下、最新のプエルトリコ版『キャリバンのすべて』(FR 2003) を使用していくことにする。

(2) キャリバンと「メスティサへ」

フェルナンデス・レタマールの『キャリバンのすべて』は、本編「キャリバン」ほか、その後書かれた「プエルトリコ版への最新メモ」(2003)・「1993年1月あとがき」(1993)⁽⁴⁴⁾・「キャリバン再訪」(1986)・「キャリバン、このわれらがアメリカの時代に」(1991)・「五百年後のキャリバン」(1993)・「喰人と向き合うキャリバン」(1999) によって構成されている。

本編「キャリバン」は、「ラテンアメリカ文化なるものは存在するのか？」(FR 2003: 21) というヨーロッパ人記者の素朴にして深刻な西欧中心主義的問いかけを受け、ラテンアメリカのアイデンティティの在処を明らかにしようとしたものである。その際、ラテンアメリカのシンボルとして主体的・積極的に位置づけられたのが、ほかならぬキャリバンである。

それでは、フェルナンデス・レタマールがキャリバンに託したラテンアメリカ像はどのようなものなのだろうか。それは「メスティサへ」(mestizaje) という語に込められている。

しかしながらこの地上の、植民地世界には、ひとつ特別なケースが存在する。とある広大な地域では、メスティサへがなんら偶発的なものではなく、むしろ本質であり、基本線をなしている。そのケースとはすなわちわれわれ自身、「われらがメスティーツ・アメリカ」なのである (FR 2003: 23)。

すでに説明したとおり、「メスティーツ」は「本来先住民インディオとスペイン人の混血者を指すが、混血者全般をも意味する」。その「メスティーツ」から派生した「メスティサへ」は、文化の「混血性」を表す、特殊ラテンアメリカ的用語であったといえる (前編、注6参照)。しかしながら「メスティーツ」は、ポストコロニアル思想において「異種混濁性」(hybridity) あるいは「クレオール」(creole) がキー概念となるに及び、それらの用語との親和性により、俄然注目を浴びることとなった。ポストコロニアル思想によってフェルナンデス・レタマールもまた「発見」された所以である。

キャリバンはこの場合、すなわち「メスティサへ」の体現者ということになる。では、キャリバンに象徴される「喰人」と「メスティサへ」とはどのように結びつくのだろうか。次の一節を見てみよう。

われわれは先住民系，ヨーロッパ系，アフリカ系，アジア系の数々の共同体の子孫となり，その根元において融合（confusión）している。われわれは互いに理解し合うために，わずかの言語しか持たない。それは植民者の言語である。……われわれラテンアメリカの，カリブの人間は，われらが植民者の言語（nuestros idiomas de colonizadores）を使っていくのである（FR 2003: 25）。

ラテンアメリカでは，多数のエスニック集団が「融合」，すなわち「メスティサへ」という形で互いを含み合い＝喰い合い，互いに理解し合うためには，「われらが植民者の言語」という逆説的な表現に端的に示されているように，被植民者でありながら，植民者の言語をも取り込む＝飲み込むこととなった。これが「メスティサへ」に含まれた「喰人」的行為である。ラテンアメリカがすべてを「喰らう」とは，以上のような意味合いにおいてである。そこからはじめて立ち上がるのが，被植民者の主体的自己であり，キャリバンのかの有名なセリフへと接続するのである。

キャリバン 確かに言葉は教えてくれた。お陰さまで悪態のつき方は覚えたよ。疫病でくたばりやがれ，俺に言葉を教えた罰だ！（シェイクスピア 2000：41）

フェルナンデス・レタマールは植民地の主体的自己としての「メスティサへ」＝キャリバン像を思想史的にも跡づけようとしている。その際に取り上げられるのが，キューバ独立運動の始祖であるホセ・マルティ（José Martí, 1853-1895）である。先に引用した「われらがメスティソ・アメリカ」はマルティからの引用である（マルティ 2005: 333-346）⁽¹⁵⁾。フェルナンデス・レタマールによれば，「マルティは，彼の体内にはカリブの血、キャリバンの血が流れていると感じている」。また，「マルティのわれらが先住民文化との同一化……。このマルティのインディオに対する接近は，もちろんのことながら黒人に対しても見られる」。そして，「そうした先住民や黒人はお互いに，あるいはまた白人と混じり合い，われらがアメリカの根元にあるメスティサへに場所を開く」（FR 2003: 53, 55, 68。強調フェルナンデス・レタマール）。マルティもまた，すべてを「喰らう」とされている。

マルティとは対象的に，「文明と野蛮」（civilización y barbarie）の二項対立図式に立つ欧化主義者として知られるアルゼンチンのドミンゴ・ファウスティノ・サルミエント（Domingo Faustino Sarmiento, 1811-1888）は，当然のことながらフェルナンデス・レタマールの批判の

対象となっている。しかし、興味深いのは、同じくアルゼンチンの欧化主義者と目されることの多いホルヘ・ルイス・ボルヘス（Jorge Luis Borges, 1899-1986）に対するフェルナンデス・レタマールの好意的な評価である。

ボルヘスのエクリチュールは彼の読書に直接由来する。……彼にとって卓越した文化創造とは図書館もしくは博物館そのものである。そこは、そこにはもともと属していない創造物の集められた場所なのである（FR 2003：70）。

「そこにはもともと属していない創造物の集められた場所」という表現のなかに、あらゆる世界の知もまた吸収する、ラテンアメリカの旺盛な「喰人」を読み取ることはむずかしくないだろう。

もちろんのことながら、フェルナンデス・レタマールが提示する、すべてと「混血」し、すべてを「喰らう」、ポストコロニアル的主体としてのラテンアメリカ像に対して、批判がないわけではない。すべてを含むと称しつつ、フェルナンデス・レタマール自身の発想が依然として男性中心主義・異性愛中心主義であるがために、そこからは女性・同性愛者が排除されているとの指摘があるが（Goldberg 2004; Nixon 1987; Ortiz 1999）⁽¹⁶⁾、残念ながらその点を論じる余裕がない。

むしろここでは、プロスペロー/キャリバン/エアリエルの相関関係から、あらためてフェルナンデス・レタマールのラテンアメリカ像を点検してみたい。ポストコロニアル的主体としてのキャリバン＝ラテンアメリカの最大の特徴は、被植民者としての自覚のもと、プロスペローたる植民者＝西欧との対立を明確に意識していることである。しかし、ここで曖昧となっているのがエアリエルの位置である。フェルナンデス・レタマールによれば、エアリエルは「キャリバンと同じ島に住む知識人」で、「プロスペローに仕えるか、……真の自由を求める闘いにおいてキャリバンと連帯するのどちらかを選びうる」。フェルナンデス・レタマールは、グラムシ的意味での「有機的知識人」としてキャリバンとの連帯を選択すると、もちろん述べてはいる（FR 2003：87）。しかしながら問題なのは、「喰人宣言」の場合と同様に、すべてを「喰らって」一体となったはずのラテンアメリカにおいて、依然として知的エリートが分離していることである。このことはそもそも、「喰らう」・「喰われる」との図式から常にこぼれ落ちてゆく存在にこそ注意を喚起すべきであることを、私たちに示唆しているのではないだろうか。その意味で、ジョナサン・ミラー演出の『テンペスト』をめぐるピーター・ヒュームの以下の解釈は、極めて示唆的である。

エアリアルとキャリバンは舞台に残され、島は彼らのものとなります。エアリアルはプロスペローが二つに折った杖を拾い、つなぎ目を握り締めて隠し、それを振りあげてキャリバンを威嚇します。この最終場面は、プロスペローがいくぶん子供じみたゲームを

完遂して島を去った後に残された未解決の問題を鮮烈に提示した一瞬でした（ヒューム 1996：19）。

むすび

本稿では、繰り返し述べてきたように、アメリカ（おもにラテンアメリカ）をめぐる展開されてきた「喰人」表象について、シェイクスピアの『テンペスト』の解釈の変遷を中心に、「喰らう」/「喰われる」ものとしての主体/客体が意味合いを変容させながら交代してきた歴史の変遷の過程を考察してきた。その詳細についてあらためてここで繰り返すことはしないが、とりわけ3節において検討した「すべてを「喰らう」ラテンアメリカ」、すなわち、ラテンアメリカの「メスティサヘ」の持つ異種混濁性について、ポストコロニアリズムまたはポストモダニズムの視点から無条件・非歴史的に称揚することには問題があると指摘する古谷嘉章に賛意を示し、古谷からの引用を最後に置くことで、この稿を閉じることにしたい。

それまで近代化にとっての障害あるいは跛行的な近代化の現れとみなされてきたラテンアメリカ社会の異種混濁性が、「先取りのポストモダニズム」として喧伝されるという事態……。異種混濁性の議論そのものは、けっして近年になって、グローバリゼーションの下で氾濫する商品化されたシンクレティズムや、ポストモダンに影響された文化理論とともに現れてきたものではない。「メスティサヘ」や「混血の文化」というメタファーにくり返し訴えてきたラテンアメリカのナショナリズムにとっては、使い古されたと言うことさえできる議論なのである（古谷 2001：145-146）。

- (1) 本稿は、平成16-19年度科学研究費補助金・基盤研究B2・研究課題「暴動する反近代としての〈過剰な食〉——規範の逸脱をめぐる複合文化学研究——」（福田育弘 [研究代表者]、神尾達之、桑野隆、後藤雄介、高橋順一、原克）の助成による成果の一部である。
- (2) 前編は『学術研究——外国語・外国文学編——』53号、2005年、23-33頁掲載。本稿全体の目的は、アメリカ（おもにラテンアメリカ）をめぐる展開されてきた「喰人」表象について、シェイクスピアの『テンペスト』の解釈の変遷を中心に、「喰らう」/「喰われる」ものとしての主体/客体が意味合いを変容させながら交代してきた歴史の変遷の過程を考察することである。前編では、まず第1節において、コロンブスの「新大陸発見」に始まり一九世紀末に至る、西欧によって野蛮と眼差された、「喰らう」アメリカ像を検討した。次ぐ第2節では、一九世紀から二〇世紀への世紀転換期において、みずからの精神性の優位を強調し、物質主義の米国によって「喰われる」ラテンアメリカ像を描いた、ラテンアメリカ知識人による肯定的主体獲得の過程をたどった。なお、前編執筆時には参照できなかったが、本橋哲也がポストコロニアル思想における問題系としての「喰人」を概観する興味深い仕事を発表している（本橋 2004；2005）。
- (3) 前編での予告では「拡散する「喰らう」ラテンアメリカ」としていたが、これを改めた。
- (4) メキシコの「壁画運動」については加藤 2003、「インディヘニスモ」およびマリアテギの思想についてはファーヴル 2002、マリアテギ 1988、小倉 2002等を参照されたい。

- (5) 「近代芸術週間」の開催に至る経緯およびその評価については、とりあえず田所 2001を参照されたい。なお、ブラジルの「モデルニズモ」(ポルトガル語表記)は一般的に理解されるモダニズムに近く、前編(2.(1)参照)で触れたスペイン語圏ラテンアメリカ(この場合、ポルトガル語圏のブラジルを除く)の「モデルニズモ」(スペイン語表記)はむしろ特殊限定的であったと、理解しておきたい。
- (6) 「喰人」のテーマとの関連では、まずオズワルドと同姓のマリオ・デ・アンドラーデ(Mario de Andrade, 1893-1945)を挙げることができる(両者は相並べて論じられることが多いため、混乱を避けるべく、以下、本稿でも便宜上両者を姓ではなく名で呼ぶことにする)。マリオの小説『マクナイマ』(Macunaíma, 1928)は、オズワルドによって「食人主義の傑作として称賛」(古谷 2001: 133)される大作である。オズワルドの妻の画家タルシラ・ド・アマラル(Tarsila do Amaral, 1897-1973)も重要である。アマラルもずばり、「喰人」(1929)と名づけた油彩画を描いた。オズワルドとマリオ、およびアマラルをめぐるのは、今福 2003、鈴木 2004を参照されたい。
- (7) とはいえ、「パウ・ブラジル詩宣言」にも喰人的な「消化吸収」のモチーフが現れていないわけではない。たとえば、以下のような部分である:「あらゆる知の消化不良に対する反動。われらが詩的伝統の最良のもの。われらが近代的示威行為の最良のもの/ブラジル人だけのわれらの時代。必要なのは化学、工学、経済学、弾道学。すべては消化される」(Andrade 1981: 7)。
- (8) ちなみに、“Tupi”という名称の音韻を用いてオズワルドは、奇しくもシェイクスピア劇のかの有名な“To be, or not to be: that is the question”(「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」)をパロディ化して“**Tupi, or not Tupi** that is the question”(「トゥピであるべきか、ないべきか。それが問題だ」)とし(Andrade 1981: 72。太字強調後藤)、このセリフもいわば「消化吸収」してしまっている。
- (9) こうしたフレーズはすべて「喰人宣言」(Andrade 1981: 67-72)からの引用であるが、煩雑さを避けるべく、個々の頁数はあえて記さない。
- (10) しかしながら、ヴォーンとメーソンはまた、影響力は大きくなかったものの、キャリバンを被植民者と見立てた先駆的著作として、フランスのジャン・ゲーノの『キャリバンは語る』(1928)とアルゼンチンのアニバル・ボンセの『ブルジョアのヒューマニズムとプロレタリアのヒューマニズム』(1938)を挙げている(ヴォーン&メーソン 1999: 212)。このことについてはさらなる検討が必要であろう。ボンセについては、たとえばVanden Berghe 1997を参照されたい。
- (11) ラミングに対するフェルナンデス・レタマールのこの評価が妥当かどうかは、別途検討されなければならない。浜邦彦の「ラミングが先駆的であったのは、キャリバンの立場から『テンベスト』を読んだというだけではない。……むしろプロスペロー/キャリバン、植民者/被植民者といった固定的な枠組みをはみ出してテクストを不安定化してしまう、強さと深さを備えている。サイードが言うとおり、「ラミングのポイントは、アイデンティティは決定的に重要だとしても、異なったアイデンティティを主張するだけでは決して充分ではないのだということにある」(浜 n.d.)という指摘は、ラミングの持つ別の可能性を窺わせる。ちなみに、サイードは『文化と帝国主義』(1993)からの引用である(サイード 2001: 40)。
- (12) 残念ながらFR 1969は未見である。
- (13) このキューバ版は〈<http://www.lajiribilla.cu/pdf/librocaliban.html>〉からダウンロードすることも可能である。
- (14) このあとがきは本来日本語版のために書かれたが(FR 2003: 98)、日本語版はその後出版されていない。残念なことである。
- (15) 本編「キャリバン」はマルチ礼賛の書といっても差し支えない。そしてそれは、マルチの精神を継承したとされるキューバ革命(1959)、およびその指導者で現在も革命政権の最高権力者であるフィデル・カストロ(Fidel Castro, 1926-)に対する称賛とも重ね合わせられる(本編「キャリバン」にはカストロの演説からの引用が頻出している)。その意味で本書はすぐれて政治的な манифест でもある。
- (16) 女性(のラテンアメリカ文化史に対する貢献)が排除されていることについてフェルナンデス・レタマールは、「1993年1月あとがき」のなかで率直に批判を認め、1989年より女性の偉人名を追加列挙したことを明らかにしているが(FR 2003: 101-102)、単なる「追加列挙」以上のなものでもないとの印象を拭えない。総じて、本編「キャリバン」以後に書かれた諸論考は、本編をめぐるなされた批評・批判を正面から受け止め、自身の描いたキャリバン像を深化・再構成するような内容とはなっていない。フェルナンデス・レタマールみずからが「ここでの私の任務は……キャリバンの立場 [ラテンアメリカもしくはキューバの立場] から語ることであり、必ずしもキャリバンについて語るものではない」(FR 2003: 165)と述べているのだから致し方ないが、物足りないと言わざるをえない。

文献

Andrade, Oswald de. 1981. *Obra escogida*. Caracas: Biblioteca Ayacucho.

ファーヴル, アンリ 2002. 『インディヘニシモ——ラテンアメリカ先住民擁護運動の歴史——』（柴田秀藤訳）白水社（文庫クセジュ）

Fernández Retamar, Roberto. 1969. “Cuba hasta Fidel”. *Bohemia*, no. 61.

———. 1971. “Calibán”. *Casa de las Américas*, no. 68.

———. 1974. “Caliban: Notes Towards a Discussion of Culture in Our America”. *The Massachusetts Review*, vol. 15, nos. 1–2.

———. 1989. *Caliban and Other Essays*. Edward Baker, trans. Minneapolis: University of Minnesota Press.

———. 1995. *Todo Caliban*. La Habana: Editorial Letras Cubanas.

———. 2003. *Todo Caliban*. San Juan: Ediciones Callejón.

フランコ, ジーン 1974. 『ラテン・アメリカ文化と文学——苦悩する知識人——』（吉田秀太郎訳）新世界社

古谷嘉章 2001. 「ブラジル・モデルニズモのレッスン——文化の脱植民地化とは何か——」『異種混濁の近代と人類学——ラテンアメリカのコンタクト・ゾーンから——』人文書院

Goldberg, Jonathan. 2004. “A Different Kind of Creature”. *Tempest in the Caribbean*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

浜邦彦 n.d. 「ラミングの審問」＜脱領域ワークショップ「歴史の中のテンペスト」＞〈<http://www.inscript.co.jp/tempest/hama.htm>〉

Hulme, Peter. 2000. “Reading from Elsewhere: George Lamming and Paradox of Exile”. Peter Hulme; William H. Sherman, eds. *The Tempest and Its Travels*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

ヒューム, ピーター 1996. 「奇妙な魚——ポストコロニアル批評とキャリバン像——」（岩尾龍太郎訳）『現代思想』1996年3月号

今福龍太 2003. 「異種交配するロシア=ブラジル」『増補版・クレオール主義』筑摩書房（ちくま学芸文庫）

岩村健二郎 n.d. 「われらキャリバン——フェルナンデス=レタマールの“キャリバニズム”」＜脱領域ワークショップ「歴史の中のテンペスト」＞〈<http://www.inscript.co.jp/tempest/iwamura.htm>〉

加藤薫 2003. 『メキシコ壁画運動——リベラ, オロスコ, シケイロス——』現代図書

Mannoni, Octave. 1956. *Prospero and Caliban: The Psychology of Colonization*. Pamela Powesland, trans. London: Methuen.

マリアテギ, ホセ・カルロス 1988. 『ペルーの現実解釈のための七試論』（原田金一郎訳）柘植書房

マルティ, ホセ 2005. 『ホセ・マルティ選集2——飛翔する思想——』（青木康征, 柳沼孝一郎訳）日本経済評論社

本橋哲也 2004. 「キャリバンは怪物か？——『テンペスト』の魔術と呪術」『本当はこわいシェークスピア——〈性〉と〈植民地〉の渦中へ——』講談社

———. 2005. 「「食人種」とは誰のことか——カニバリズムの系譜」『ポストコロニアリズム』岩波書店（岩波新書）

Nixon, Rob. 1987. "Caribbean and African Appropriations of *The Tempest*". *Critical Inquiry*, vol. 13, no. 3.

小倉英敬 2002. 『アンデスからの暁光——マリアテギ論集——』現代企画室

Ortiz, Ricardo L. 1999. "Revolution's Other Histories: The Sexual, Cultural, and Critical Legacies of Roberto Fernández Retamar's 'Caliban'". *Social Text*, no. 58.

サイド, エドワード・W 2001. 『文化と帝国主義2』（大橋洋一訳）みすず書房

シェイクスピア 2000. 『テンベスト』（松岡和子訳）〈シェイクスピア全集・8〉筑摩書房（ちくま文庫）

Skura, Meredith Anne. 1989. "Discourse and the Individual: The Case of Colonialism in "The Tempest". *Shakespeare Quarterly*, vol. 40, no. 1.

鈴木勝雄 2004. 「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」『ブラジルのモダニズム——前衛とナショナル・アイデンティティ——』鈴木勝雄，三輪健仁編『ブラジル：ボディノ・スタルジア』東京国立近代美術館

田所清克 2001. 「ブラジルの近代主義運動と学問・芸術——「近代芸術週間」の意義——」『ブラジル学への誘い——その民族と文化の原点を求めて——』世界思想社

Vanden Berghe, Kristine. 1997. "The Forgotten Caliban of Anibal Ponce". Nadia Lie, Theo D'haen, eds. *Constellation Caliban: Figurations of a Character*. Amsterdam: Rodopi.

ヴォーン, アルデン・T, ヴァージニア・メーソン・ヴォーン 1999. 『キャリバンの文化史』（本橋哲也訳）青土社